W.E.グリフィス福井在住 150 年記念展示　　廃藩置県 150 年

西暦 1871 年 7 月 18 日、福井藩士たちは震撼した。そうグリフィスは著作で語る（1876 年出版の *The Mikado's Empire*。山下英一訳『明治日本体験記』）。その一月半前、福井など六藩（熊本・徳島・彦根・米沢・高知）および大臣三条家の代表者が東京に会し、藩政の改革を劇的に遂行しようと協議していた。改革を先導する高知藩がすでに前年に発した内容は、士族の文武常職を廃する、すなわち武士による官職の独占を終わらせ、平民に登用の道を開き、また平民を兵士として徴するという、武士身分の存在意義を否定して初めて可能なものだった。平民が兵士となるのであれば、武士の世襲の家禄も名分が立たない。家禄の債券化による処分という、武士に対して身分に頼らざる自立を強いる宣告がなされた。その厳しい道に倣おうとする有志諸藩の連携の輪が広がり始めていた。最初の会合の翌日、東京在住の老公松平春嶽が米沢藩知事上杉茂憲と会っているのも、同志間の対話であったとみられる（友田昌弘『戊辰雪冤』）。福井藩の代表小笠原幹（こわし）（旧名牧野主殿）はグリフィスの日記にも度々名前の見られる、藩政の柱の一人だった。そしてグリフィスが著書に描写する、福井藩運命の一日を迎えた。

その日のグリフィスの日記原文（山下英一『グリフィスと福井』より。和文は引用者）。Proclamation from Imperial Gov. dispensing with officers and reducing incomes 「帝国政府から官員と禄の削減の布告」とある。上記の事情から宣言は中央政府ではなく藩が行ったものだが（「士族卒文武の常職を解候については、禄制今一層改正、大禄は更に

減削を加え、惣て禄券を給候」松平家家譜)、中央の了解を得て東京で発せられ、グリフィスによればこの日の午前 10 時に明新館に届き、藩士たちの顔を青ざめさせた。原文の続き excitement among thousands of families all over Japan.「全国の数千の家族が動揺」という記述からも、グリフィスが事態を福井一藩のものとは認識していないことが分かる。Sito, Sasaki & Tangawa in the school, Inowi, Nakamura & my guard yakonin out of office. 福井県文書館刊行の藩士履歴により、当日（和暦 6/1＝西暦 7 /18）「学校幹事」斎藤敏や「御雇洋人取扱方」すなわちグリフィスのパートナーであった佐々木権六が「今般御改正に付き免職」あるいは「出仕に及ばず」とされたことが確認される。「御雇教師警衛勤」の yakonin(役人）井上剛太郎と中村禄三郎も同様である。

『明治日本体験記』においてグリフィスは、「シンドバッドが海の老人を降り落とした」「新生日本万歳！」と喜んでいるが、大して仕事の無い役人の数が多過ぎて民の負担だという認識は、当時の改革派の武士に共通のものだった。翌年政府が徴兵告諭で「世襲坐食の士は其禄を減じ」と述べたように、維新という革命の主体が武士であればこそ、彼らは自らの身分に属する「坐食の徒」に対し厳しい処断をいとわなかった。累代主従の絆を断たれた側の激情がどこへ向かったかも、グリフィスは書き残している。「今日、町の武士の家には激しい興奮が渦巻いている。武士のなかには三岡を殺すとおどしている者がいるという」。自ら武士団を解体した福井藩幹部の志は、三岡八郎（由利公正）たち天皇主義者 imperialists による革命、すなわち維新の推移の中で理解するほかない。

今から150年前まで、日本は武士が治める国だった。武士は軍人で、他の誰かに仕えて働くことが仕事だった。多くの家来に支えられて地方を治める武士が「大名」であり、その家来たちを「藩士」と呼ぶ。彼らの人生は、主家に仕える自家の名誉を守るためにあった。大名が江戸の徳川家に仕えていた「江戸時代」、江戸の徳川家の当主（将軍）が事実上日本の君主だった。本当はそうではなく日本の君主は天皇陛下だけだというimperialists が勃興し、大名たちが江戸の徳川家に仕えるのをやめたことで江戸時代は終わった。江戸の徳川家の政府（幕府）はなくなり、全く新しい政府が京都にできた（じきに東京に遷都）。大名たちは天皇に仕える地方領主として、そのまま残った。

幕府がなくなった後、大名の治める地方政府は「藩」、中央政府が直に治める地方支部は「県」と呼ばれた（兵庫県、奈良県など。京都や東京は「府」と呼んだ）。藩は大名に累代の忠誠を誓う武士たちの団体であり、諸藩それぞれの歴史があり組織があった。その諸藩の支持によって、天皇の新たな政府は存立していた。戊辰戦争によっていっそう財政的に行き詰まる藩が多い中で、中央政府としては整理の大ナタをふるって国政の財源をふやしたいのが本音ではあっても、そんな権利は彼らになかった。藩士たちの家禄は、その家が主家に仕えてきた歴史そのものだった。また大名の家来である藩士を、中央が勝手に異動させられるはずもなかった。中央政府の人材はいわば各藩からのレンタル移籍だった。中央の財政基盤も、潰した幕府の遺領でしかない。天下の人材と資本を集めて諸外国に負けない国を作るという維新の志に、現実はそぐわなかった。

日本の君主は天皇ひとりだけで、将軍も大名も君主ではない、というのが維新の論理だった。だから幕府の統治権（大政）は天皇から委任された物と認識され、その定義によって奉還された。ならば当然、大名が治める領地も領民も天皇からの預かり物のはずだった。天皇の新政府の発足に先立つ徳川慶喜の英断は、彼を追放した革命の勝ち組を含めた諸藩に、一つの範を示した。王政復古の翌 1869 年に行われた「版籍奉還」は、大名が領地領民を天皇陛下にお返しするという改革だった。これにより「藩」は大名に仕える家臣団ではなく、ただの地方自治体となった。旧大名と藩士たちはもはや主従関係ではなく、どちらも天皇に仕えている上司(知事)と部下の関係となった。中央政府は藩政に強力に介入し、府県同様の地方組織への画一化を図った。複雑な武士間の身分差を全て「士卒」として解消し、官職も統一・簡素化し、財政状況を報告させ、収入にみあう支出、すなわち削禄を求めた。諸藩の家禄支給高は全体で維新前の凡そ六割に圧縮された。旧大名と旧臣たちが旧来の領地を治めている外見だけは変わりないため、1871 年 3 月に福井に来たグリフィスは、「封建制」（殿様と家臣たちによる統治）の領国で生活することになったと好奇心いっぱいに語っているが、内実は上述の如く、その「封建制」が彼の目の前で突然崩れ去るのはわずか半年後のことだった。

天皇の新政府は、日本を劇的に変えようと目論んでいた。財政および通貨を統一し、全国にインフラを整備し新産業を振興して、国際社会の中で馬鹿にされない近代国家を一日も早く作りたいと、若き官僚たちは熱望していた。国のため中央が地方に求める負

担は、諸藩の存立を脅かした。財政再建の道絶えた小藩は廃絶に追い込まれた。お金の偽造に手を染める藩も続出した。雄藩薩摩は封建制に固執したが、軍権の統一や藩の解体を建言する大藩も次々に現れた。高知藩は知事自らの手によって武士団の解体を宣言し、彦根や福井、米沢など“公議”を政治の旨として動く同志諸藩が土佐に続いた。

「従来文武の業士族卒の常職に帰し、平民に至候ては不学無術、終に賤陋に果候様相成候は全く中古封建の余弊也。今や士卒の常職を解き広く教育選挙の法を設候に付、士民平均の道理を会得し、各自知識を開き材能を長じ、皇国に奉報候様厚く可心懸事」「禄制今一層改正、大禄は更に減削を加へ、惣て禄券を給候」「士族卒共其実は同一人民たれば、其欲する所に従ひ農商の業に就き候儀勝手たるべき事」「官員に非ざる者は礼式の外廃刀勝手たるべき事」。福井藩士を動揺させた知事からのお達しは、廃藩後に学制や徴兵告諭において否定される身分社会への決別を、秩禄処分で閉幕する中世以来の“武士の時代”の終演を、すでに宣告していた。ただ祖国の名誉ある再興のために。

かかる情勢の中で、東京の政府幹部が全藩を一気に廃絶する「上からのクーデター」を決意したのは、発令（和暦：明治 4 年 7/14、西暦：1871 年 8/29）のわずか数日前だった。突然知事職を解かれた全国の旧大名たちは東京に呼び集められた。「朝廷の御処置未だ三藩の鼻息を仰ぎ面目なし。去りながら先ず此一挙あって一層の進歩なり」。高知や福井との連携の中心にあった米沢藩士宮島誠一郎が残した言葉には、国政の主導権を手放さない藩閥閣僚への冷めた眼差しと、国家のため廃藩置県に先んじて自己犠牲の

道を歩んでいた誇りと、何よりも新日本の興隆を願う維新の武士の志がこもっている。その地方武士の志こそ、近代理化学の教師を福井へと招いたものだった。その教師の『明治日本体験記』には、東京からの指令に動揺する藩士の様子を描いた記事の翌 7/19 のこととして、むしろ多くの藩士たちが改革を英断だと支持し、祖国が英米に並ぶ名誉ある国となる道を歩む、明るい未来を語ったとつづられている。

以下 *The Mikado's Empire "The Last Year of Feudalism"*より（引用者訳）

1871 年 10 月 1 日「今朝早くから、カミシモ（礼服）のサムライたちが告別のための心の準備をして、お城に集まってきていた。私（グリフィス）が大広間に赴いたのは九時だった。私はその印象的な光景を決して忘れない。部屋を仕切る紙の滑り戸が全て取り払われ、畳敷きの広大な空間になっていた。階級順に居並ぶのは、慇懃な礼服に身を包み、剃り上げた頭頂に撃鉄のような結び目をのせ、膝まづいた自分の前に真っ直ぐ立てた刀の柄を両手で握りしめている、福井藩のサムライたち三千人。垂れた頭に去来して尽きない思いは、この場の意味の重さから生じていた。それはただ、彼らの封建領主とのひとつの告別というだけのものではなかった。彼らの父祖が七百年にわたって従ってきた制度の、厳粛な埋葬だった。それぞれの表情に浮かんでみえたのは、過去を見ているのか、あるいは不確かな未来を探ろうと努めているのか、そんな遠い眼差しだった。

私は彼らの心の内がわかるような気がしていた。刀はサムライの魂であり、サムライは日本の魂だ。それが名誉の座から外されて、無用の長物として捨て去られ、商人のイ

ンク壺と台帳に場所を譲る？サムライが商売人よりも下に、名誉の値打ちが金よりも下になる？日本人の精神が、日本の富を吸い上げているあさましい外国人たちと同じレベルにまで落とされる？我が子たちもそうなるのか？額に汗して働き、食い扶持を稼がねばならないのか？世襲の年金を止められたり、涙金程度にまで減らされたりしたらどうすればいい？栄えある騎士戦士たちを父祖とし、その血と精神を受け継いでいる我らが、平民の群れの中に身を投じる以外にもうどうしようもないというのか？娘を商売人の嫁にするぐらいなら名誉ある貧しさの中で飢える方がましだというのに、今は生をつなぎ胃を満たすために我が家系を汚さねばならないのか？我らを待つ未来とは、一体？そこに居並ぶ家来たちの暗い表情の海は、そんな思いが落とす影に覆われているように見えた。針一本落ちても聞こえる静粛により、ダイミョウの入来が告げられた。

　松平茂昭、福井藩臣たちの棟梁、越前侯であった人物、明日からは高貴な一私人となる人が、広い廊下を渡って大広間へ進んで来た。年齢はおそらく三十五歳、その表情は硬かった。…彼が通りゆくごとに、全ての頭が下がり、全ての剣が右手に伏せられた。松平は整列した家来たちのただなか、大広間の中央へと進んだ。深い、だが表には出すことのない感情と共に。…それから、主席閣僚の読む短くも堂々たる辞によって、彼らの藩および主従関係の歴史、1868 年の革命に到った原因と、結果皇室の権力が旧に復したこと、そしてミカドが諸侯に封土の返納を命じた理由が簡潔に、感動的に物語られた。結びに、彼は自分の家来全てに対し、彼らの忠誠を完全にミカドと皇室へと移すよ

う厳命した。そして彼らの新たな縁が、また彼らひとりひとりが、その家族が、暮らしが、成功と繁栄に恵まれるようにと、簡にして要を得た言葉で、家来たちに厳かな別れを告げた。(※)」翌日、大勢の旧領民に見送られて、福井藩最後のプリンス松平茂昭は東京へ去った。「数百人の老人たち、女性たち、子供たちが泣いていた」とグリフィスは書いている。名誉の身分は、祖国の名誉のため身代わりに滅び去った。

グリフィスが教えた学校は、何重ものお堀に囲まれた城内の中心にあり、登校する子供たちも刀を差したサムライだった。城郭都市福井での生活は、西洋の騎士物語の舞台となる中世にまぎれこんだ感覚を彼に与えた。廃藩後すぐ、福井城のお堀の埋め立てや建物の取り壊しが始まり、半年前の日常の光景は過去のものとなった。武士団の解体により、その拠点は無用となった。福井県（まもなく足羽県に改名）となった行政府では、村田氏寿が首班の座（参事）に就いた。村田はグリフィスの仕事を高く評価していたが、東京移住を希望するようになったグリフィスを止めることはできなかった。すでに由利公正たちも東京に召喚されていた。グリフィスのいう「エクソダス（脱出）」が彼の生徒の間でも生じていた。所属の武士団を解体された旧臣たちは、それぞれの人生を歩まねばならなくなっていた。士族の子弟は生きる道を自ら切り開かねばならなかった。

東京ではすでに、全国の藩から強制徴募された学生たち（貢進生）が官立の洋学校（当時は南校といった、東京大学の前身）で学んでいた。国家建設のため緊要な洋学を学ぶ機会と施設が地方に乏しいことを考慮した政策で、大藩三名、福井など中規模藩は二名、

大野など小藩は一名を選考して東京に送り出していた。それぞれ藩の名誉を背負いながらも、外国語にふれた経験もない生徒であればストレスにつぶされ、全体に学業は進まなかった。政府はいったん学校をリセットし、貢進生の半ば以上が学校を去った。残った学生たちは出自の藩を失いながら、新日本のため懸命に学んだ。東京でグリフィスの生徒となった少年たちの多くが彼ら旧貢進生であり、明治の各界で活躍することとなる。

廃藩の翌年、中央政府が「学制」を発した。「家に不学の人なからしめん」という通り、近代国家を支えるに足る国民を育てるための初等教育に力が注がれた。男女ともに学びを得た国民が担う社会。武士身分限定で世襲のポストとして公務を担うのではなく、職責にふさわしい学びを成す機会があらゆる階層に開かれている社会。武士を農民たち産業者に寄生する階級とみなしていたグリフィスは、廃藩後の日本が目指した国家像を熱く支持した。それこそ廃藩に先立って福井藩が布告した改革宣言の趣旨だった。

グリフィスが東京で奉仕したのは国家エリート養成校だったが、そうした高等教育と初等教育とをつなぐべき学校（中学校）が、新時代において存亡の危機に立たされた。限られた予算の中で優先度を落とされた中等教育は、その担い手だった旧藩校を支えるだけの財政基盤を廃藩によって失った。福井の明新館もまた、廃校になった。

しかし、高給の外国人教師を招いたほどの福井の武士の教育熱、郷里の子弟教育への熱情は失われなかった。旧藩主の支援も得て、旧明新館すなわち福井中学は復活した。藩はなくなっても、旧藩士族たちの誇りが地方を支え続けたのが、明治の新日本の一面

だった。また、彼らの友人として、教師として、福井で日本史の決定的瞬間に立ち会ったグリフィスはジャパノロジストとして覚醒し、その後の人生をかけて日本史の理解と紹介に献身し、著作という遺産を我々に残した。福井藩最後の日々を描写した *The Mikado's Empire* は、日本を知るための代表的著作として二十世紀前半まで米国で広く読み継がれ、廃藩 150 年の今日に、近代都市へ生まれ変わる直前の福井の人々の姿を生き生きと伝えている。　　（福井市グリフィス記念館　2021 年 8 月の展示より）

※参考：1872 年 9 月「学制」

人々自ら其身を立て、其産を治め、其業を昌にして以て其生を遂る所以のものは他なし、身を脩め智を開き才藝を長ずるによるなり。而て其身を脩め智を開き才藝を長ずるは、學にあらざれば能はず。…從來學校の設ありてより年を歴ること久しと雖ども…學問は士人以上の事とし、農工商及び婦女子に至っては之を度外におき、學問の何物たるを辨ぜず…人たるものは學ばずんば有べからず…自今以後一般の人民華士族卒農工商及婦女子、必ず邑に不學の戸なく、家に不學の人なからしめん事を期す。

同年 12 月「徴兵告諭」

大政維新、列藩版図を奉還し、辛未の歳に及び遠く郡県の古に復す。世襲坐食の士は其禄を減じ、刀剣を脱するを許し、四民漸く自由の権を得せしめんとす。…是において士は従前の士に非ず。民は従前の民にあらず、均しく皇国一般の民にして、国に報ずるの道も固よりその別なかるべし。

※廃藩に際して、松平茂昭から旧臣たちへのメッセージ（越葵文庫「家譜」）

吾惟みるに、我家受封以来幾んと三百年、各の祖先と共に講武修文以て藩屏の任を効す。向きに版籍返上の時に在ても、不肖茂昭の如き尚知事の命を拝す、天恩の大ひなる所にして感戴に堪へざる所なり。今や詔を下され、藩を廃し県を置き、前日の知事を免じ、冗を去り簡に就き、政令帰一名実相副の御趣意、恐れながら数百年の積弊を御一掃あって大ひに皇国の興隆を謀らせらるる所以、深く拝祝の至ならずや。各厚く朝旨を奉戴し、職を尽し業を励み、以て天恩に報ひ奉らん事を惟祈る。茂昭命を奉じ上途近きに在り、感情更に深し。故に聊愚意を示す事爾り。

福井藩校明新館と福井県の歴史

1855(安政二年)　明道館、城内三の丸（元大谷屋敷）で開校。
文久年間　移転：八軒町の屋敷へ　→　木倉町の屋敷へ
1869(明治二年一月)　福井藩が版籍奉還上表。六月、松平茂昭が福井藩知事任命。
五月、明新館、開校（下馬門内北川屋敷。石碑あり）→十二月、本丸へ。
1870(明治三年)　英語教師 A.ルセーの着任（福井藩最初の御雇外国人）
1871(明治四年)　3 月 4 日(四年一月)　理化学教師 W.E.グリフィスの福井着任。
6 月 30 日　ルセーの解任(のち青森県で旧斗南藩士らと牧場経営)。
7 月 18 日(四年六月)　藩政改革。学校の動揺をグリフィスが描写。
8 月 29 日(四年七月)　廃藩置県により、福井県発足。　10 月　実験室の完成。
12 月 31 日(四年十一月)全国で 3 府 72 県に統合。福井県は大野県や丸岡県などと統合し、翌月改称して足羽県に（参事：旧福井藩士の村田氏寿)。
鯖江県や小浜県は統合して敦賀県に（参事：秋田藩出身の熊谷直光)。
1872(明治五年)　1 月(四年十二月)　グリフィスの離任。 3 月 E.マジェットの着任。
8 月 M.N.ワイコフの着任（ラトガース大学を卒業してすぐ。翌年東京で結婚)。
9 月(五年八月)　学制発布（全国を八大学区に分ける。足羽県と敦賀県は第三大区。翌年から七区制で第二大区に)。大学区の下に、中学区、小学区。
中学校は下等 3 年(14～16 歳)、上等 3 年(17～19 歳)。

1873(明治六年)　　以降、和暦と西暦は同じ

1月14日　敦賀県（参事：旧長州藩士の藤井勉三）と足羽県が合併し、現在と同じ県域に。旧足羽県庁(旧岡部屋敷)が敦賀県支庁に。

同月　明新館は私立福井中学（第二大区二十八番中学区）となる。

2月17日　グリフィス旧居の洋館火災で焼失。マジェットとワイコフは無事。

5月　マジェットの解任（県庁所在地の敦賀で教師をつづける)。

11月　県下四中学区の連区中学となり、師範学科を開設（→翌年、独立の学校に)。

1874(明治七年)　4月　旧足羽県庁へ移り、福井明新中学となる（旧校舎は独立した敦賀県師範学校が使用)。　7月　ワイコフの解任（のち明治学院教授となる)。

1876(明治九年)　　8月　敦賀県（県令：旧熊本藩士の山田武甫）が解体、消滅。嶺北地方は石川県（県令：旧大垣藩士の桐山純孝)、嶺南地方は滋賀県（県令：旧平戸藩士の籠手田安定）に併合。　明新中学、廃校。

1877(明治十年)　　師範学校の校舎新築。

1878(明治十一年)　旧藩主松平茂昭が墓参で福井へ。中学再建のため千円と家屋を寄付。

1879(明治十二年)　1月　公立明新中学、石川県により設立認可（旧城鉄門内)。

9月　学制にかわる教育令布達。学区制を廃止、町村を基盤とした小学校整備に転換。（教則で中学校は初等4年、高等2年に)。

1881(明治十四年)　石川県（県令：旧米沢藩士の千坂高雅）の越前と、滋賀県（籠手田県令）の敦賀・若狭を合わせた現在の県域で、福井県が再発足（県令：旧彦根藩士の石黒務)。県庁は佐佳枝上町。県立福井中学の再発足へ。

1882(明治十五年)　1月　旧城の下馬門内仮校舎で福井中学の開校式。

1883(明治十八年)　11月　旧城内に新校舎建設。

1889(明治二十二年)　　福井中学が尋常中学校を称し、女子部付設。

1892(明治二十五年)　　女子部が独立＝高等女学校（佐佳枝上町)。

1898(明治三十一年)　　師範学校、豊島へ移転（跡地は県庁、議事堂として利用)。

1899(明治三十二年)　　高等女学校、宝永上町へ移転。

1919(大正八年)　　火事でグリフィスの実験室類焼。

1923(大正十二年)　　県庁が現地（旧城本丸）へ移転。五年後、県庁跡地(であり、師範学校跡地)に百貨店だるまや開業。

1927(昭和二年)　　グリフィス夫妻、福井訪問。福井中学、高等女学校などで講演。

1930(昭和五年)　　高等女学校、今の高志高校の場所へ移転。

1933(昭和八年)　　福井中学の校舎、焼失。

1936(昭和十一年)　　福井中学、現地（藤島高校）に移転。

1948(昭和二十三年)　　福井中学と高等女学校を統合して、第一高校となる。

1949(昭和二十四年)　　一高と二高工業課程を統合して、藤島高校となる。

二高（農業・家庭技芸課程）は高志高校となり、翌年高等女学校跡地へ移転。